

第54回(平成28年度)北海道優良米生産出荷共励会最優秀賞受賞者現地報告

移植栽培部門 個人の部

第4部 最優秀賞 (もち2.0ha以上)

受賞者氏名 木下 尚広
住所 天塩郡遠別町字久光1278番地
審査員 北海道農政部生産振興局技術普及課

項目	年次	平成26年	平成27年	平成28年	3カ年の平均
水稻作付面積		15.8 ha (16.3)	13.5 ha (14.0)	13.7 ha (14.0)	14.3 ha (14.8)

注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。()内はこれらを含む作付面積。

1 経営の概要

経営耕地面積 17.2ha
水稻作付面積 13.7ha

2 家族の就農状況

(平成28年12月1日現在)

本人・続柄	年	性別	平成26年	平成27年	平成28年
本人	45	男	○	○	○
妻	46	女	○	○	○
父	80	男	○	○	○
母	76	女	○	○	○

3 立地条件と稲作の経歴

(1) 地勢・立地条件

遠別町は留萌振興局の中北部に位置し、南は初山別村、北は天塩町に接し、西は日本海に面する地区で町域は東西約27km、南北約51kmに及び面積は約590.9km²である。

気候は北海道北部でありながら日本海を流れる対馬海流の影響を受けるため高緯度にもかかわらず比較的気温は低下しない。また町内を流れる遠別川はピッシリ岳を水源としているが位置的には南部であることから水温が比較的高く日本最北の米どころとして良質なもち米生産が可能となっている。

(2) 稲作の歴史

遠別町の水田は、大正7年の春、佐藤吉蔵氏により清川に造田が始まった。

その後、小規模の造田が各処に行われたが、種子は村内で譲り受けた在来坊主のため反収は3俵内外だったといわれている。

近年においては、昭和58年にもち米指定生産団地に指定され、最北のもち米として現在（平成28年）の作付面積は、434haで品種構成は「風の子もち」52%、「きたふくもち」38%、「はくちょうもち」10%となっている。

その中で、木下氏は農家の3代目で遠別町での営農の歴史は、祖父が明治31年に富山県より遠別町に入植したのが始まりである。その後、木下氏の父が農地を受け継いだ。

木下氏は、平成9年に就農し平成13年には父の経営を引き継ぎ、その際、遠別町の冷涼な気象条件から初期生育の優れる成苗ポットの導入を行った。その他にも安定確収のために基本技術を励行し、地域の平均収量以上の収量を確保している。また地域での信頼も厚く平成28年よりJAの理事も務めている。

4 稲作技術の特徴

(1) 透排水性とその改善等

透排水性向上のため、ほ場に心土破碎を毎年実施している。また融雪促進のため、ケイカルを融雪剤としてほ場に施用し、ケイ酸分の投入、ほ場の乾土化による春作業の適期推進に努めている。

項目		年次	平成26年	平成27年	平成28年
堆厩肥施用量kg/10a			—	—	—
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	100%	100%	100%
	当年産	搬出	—	—	—
		秋鋤込	—	—	—
土壌改良材kg/10a	資材名		ケイカル	ケイカル	ケイカル
	施用量		40kg	40kg	40kg
透排水性改善			心土破碎	心土破碎	心土破碎

(2) 育苗と移植

種子は全量、苫前町にある共同温湯消毒施設で処理された物を使用しており、環境にやさしい米づくりを心掛けている。また、毎年全量を更新している。

健苗育成は特に注意を心がけており、灌水は最小限にとどめ草丈を伸ばさず、分けつを確保してからの移植に心がけている。更に側条施肥により、初期生育での茎数を確保するよう努めている。

項目		年次	平成26年	平成27年	平成28年
育苗形式名			成苗ポット	成苗ポット	成苗ポット
移植時期			5月23日～5月31日	5月22日～5月29日	5月23日～5月30日
栽植密度	畦幅×株間		33cm×14cm	33cm×14cm	33cm×14cm
	m ² 当たり株数		21.6株/m ²	21.6株/m ²	21.6株/m ²

(3) 作付け品種

過去の作付け品種の中から、品種特性、収量生、土壌に合った品種として、作付品種は「風の子もち」のみとしている。そのため、ほ場ごとの刈取適期が集中しやすく、適期刈取の実施が比較的難しい状況にある。そのため、刈り遅れによる品質低下を防ぐため、適期内で移植時期をずらしている。これにより品質低下の少ない収穫作業を実施している。

項目		年次	平成26年	平成27年	平成28年
作付面積	品種名	風の子もち	16.3ha	14.0ha	14.0ha
	合 計		16.3ha	14.0ha	14.0ha

(4) 水管理

水管理の基本である畦塗りは、毎年全ほ場の2割程度を行うことで、漏水防止と深水管理ができるほ場づくりに努めている。また、ほ場巡回時には、手作業による畔補修もこまめに行っている。

生育期間の水管理は、生育初期には初期茎数確保のため浅水管理を実施し、前歴期間、冷害危険期の水管理は最大で20cmの深水管理を行っており、ほ場ごとの生育段階に応じた適切な水管理を実施している。

(5) 病虫害防除

定期的に各ほ場の巡回を行い、病虫害の早期発見及び対応を行っており、普及センターやJAから発信される技術情報を積極的に活用し、適切な防除に向けた情報収集を心掛けている。カメムシ防除については、地域におけるほ場でのすくい取り調査による発生予察情報に基づき、「遠別町水稻航空防除協議会」で無人ヘリによる一斉防除を行なっている。

これらにより、必要最小限ながら的確な防除を行っている。

(6) 収穫・乾燥

収穫については、地域の刈取適期判定会にて、玄米品質（整粒歩合・網下米比率等）を参考に作付ほ場ごとの刈り取り順を決め、品質と収量の向上に努めている。

また、収穫後の乾燥調整は、JAの大型乾燥調製施設「北限夢工房」において共同乾燥調製を行っており、作業の効率化と品質の均質化に努めている。その結果、当年産の製品反収は約10.7俵となった（地域の平均的な製品反収は約9.5俵）。また、製品率も95～96%程度と高くなっている。

項目	年次	平成26年	平成27年	平成28年	3カ年の平均
総 出 荷 数 量	①	1,845俵	1,381俵	1,498俵	4,724俵
一 等 米 数 量	②	1,845俵	1,381俵	1,498俵	4,724俵
一 等 米 比 率	②/①	100%	100%	100%	100%

5 省力・低コスト、安定経営の取り組み

(1) 省力・低コスト対策

収穫に当たっては、3戸共同でコンバイン、トレーラー、運搬車輛を使用している。また乾燥機は個人で保有しておらず、すべて地域のライスセンターに搬入することにより、農業機械への投資抑制や修理費等のコスト削減、刈り遅れによる品質低下の回避に努めている。

(2) 安定経営対策

もち米の需要量に応じた生産を視野に入れており、需要の増減に応じた生産量を確保するために水張転作も考えている。また水稻以外の作物構成も考慮することで、全体の営農面積を維持しながら、高品質で安定した生産物を供給できるよう規模での営農を目指している。

(執筆者：留萌農業改良普及センター 主査（地域支援） 本 山 正 浩)